

癌とナッパ・青汁食

医学博士 遠藤仁郎述

癌をたとえれば

癌は、自分のからだの細胞が変質し、悪性（癌）化することにはじまる。

「たとえれば、不良少年のようなもんだ」と、大学の病理の講義でいたことがある。

つまり、癌とからだの関係は、ちょうど、バッコしようとする青年の不良化・過激化と、それを食いとめようとする治安当局の戦いに似ている。

悪性（癌）化

癌を誘発するもの、すなわち発癌（癌原）物質——化学物質・放射線・ビールスなど——や発癌促進物質があり、その刺戟によって、細胞に突然変異がおこり、悪性化のいとぐちができる。

それが進行して、したいに癌化するわけだが、一旦癌化すると、その細胞はとめどなく増加しはじめ、ついに癌腫になる。

細胞の抵抗力

しかし、この際、細胞自体に、十分の防衛力があれば、それに抵抗し、そう簡単に悪性化することはある

まいが、何らかの理由で抵抗力・防衛能力がよくなつて（下地ができて）いれば、変質（悪性化）されやすいうだろう。

それは、志操堅固な青年であれば、たとえ誘惑があつても、よくこれをはねかえし、すぐさま不良化することもあるまいが、不平不満をもち、思想的に不安定であつたり、すでにグレーカつていれば、たちまち、過激化・暴力化してしまうようなものだ。

防衛組織

からだには、自分のもの（自己）と、そうでないもの（非自己）をみわけ、それを排除しようとする防衛（免疫）組織があり、免疫リンパ球が、その第一線の監視にあたつている。

そして、少しでも異常のある細胞ができれば、ただちにそれをキャッチし、その情報を防衛（免疫）組織につたえる。

全身の免疫組織は、この情報に応じて活発な防衛活動をはじめ、各種の免疫物質を動員して、異常細胞の排除・殲滅に全力をそそぎ発病を防ぐ、という仕組になつていて。

しかし、この監視リンパ球や免疫組織の能力に欠陥があつて、異常細胞の捕捉がおくれたり、制圧活動が不十分であれば、細胞の悪性化・癌化は無制限に進行することになる。

それは、不良分子の過激化・暴力化の監視にあたる治安要員、情報網や全国組織のそれに似ており、それらの能力がすぐれており、正確、活発であれば、不良分子はすみやかに摘発され、殲滅されるであろうが、もし、そこに、何らかの欠陥があれば、ついには、全国的にひろがり、手におさえなくなつてしまうことにた

とえられる。

防衛能低下の素地

そこで、一般細胞の抵抗力や、全身防衛組織の能力の低下は、発癌の素地をなすものといえるわけだ（素因）が、そういう素地には、

生れついたもの、すなわち、遺伝的、あるいは母胎内でうけるものもある——癌に遺伝がいわれ、母胎内でうける薬品や放射線の影響によるものがあるなど。

また、生後の日常生活の不自然化・不合理化、すなわち、環境の悪化、食養のあやまり（不完全食・有害有毒食品）、喫煙・薬品・放射線の乱用、運動の不足、精神的ストレスなどからまねかれた血のにじりの結果によるものもある。

が、これまた、若ものの不良・不徳化の素地や、治安当局の能力の低下が、家庭の崩壊、教育や世相のみだれによる人心の荒廃、道義の頽廃にもとづく、身体的・精神的不健全化にあることにも似ていよう。

世なおし

そして、若ものの過激化・暴力化を防ぐためには、みだれきり混迷しきっている世相の浄化。つまり、世なおし、すなわち、政界・財界の浄化、福祉の充実、生活の安定、治安の確立、教育や家庭のたて直しをはかり、国民の一人一人が、身体的にも精神的にも健全であることが根本であるように、細胞の悪性（癌）化を防ぐには、発癌物質や促進物質を極力へらし、除外するとともに、個々の細胞や、全身の防衛組織を強化し、発癌物質の影響をはねかえし、癌化細胞は、これをすみやかに捕捉・制圧・殲滅するに十分な能力をあ

たえることであり、そのためには、環境の浄化、食の自然化（完全化・安全化）、適度の運動、ストレスの解消など、あやまつた日常生活のたてなおし、合理化・自然化をはかり、血をきれいにすることが根本であろう。

(五二一・一一二)